

## 総合演習（発達障害コース 2008）

### － Learning Promotion の実践 －

特別支援教育講座・長尾秀夫

#### 1. 授業改善に向けての準備

一昨年（平成 19 年度）の教育学部 FD シンポジウムの発表を受けて、発達障害コースも総合演習の授業を本来の形態にすべきと考えた。シンポジウムで発表があった他の講座の実践を学生達に紹介し、本来の総合演習のあり方を解説して、前年度末に 1 時間の講義（教育実践論）で話し合いも行った。この授業には発達障害コース 1-2 回生が全員参加していた。ここで、2 回生に対して 2 グループに分かれて研究する、後期の 15 回の授業中にできる研究テーマを折に触れて話し合っておくことを伝えた。

#### 2. 授業形態と規模

2 回生 12 人が 6 人ずつの 2 グループで研究することを決めてきた。教員は必ず学生全員で研究することを確認した。

授業ではそれぞれのグループの誰かが毎週研究の進捗状況を報告することを伝え、教員はその場で助言、情報提供をした。

また、途中でまとめをしながら進め、後輩達にも応援してもらい、後輩達がその後に取り組み参考としてもらう意味でも、1、2 回生の教育実践論で 3 回の発表の機会を設けた。

#### 3. 授業の目的

総合演習の授業では、学生全員が一丸となって主体的に実地調査や情報収集を行い、ディスカッションをして互いの意見を調整してまとめてゆくこと、研究報告や模擬授業などで表現力を習得することを目的とした。

#### 4. 到達目標

この到達目標には教育学部として共通するものが設定されていたので、この授業もそれに従った。

1. 現代社会が直面している複合的・横断的な諸問題について視野を広げ、解決策を提案できる。

2. 研究企画力、情報収集力、研究統活力と発表力、評価力、グループワーク力など、課

題解決に必要な資質能力を身につける。

3. 現代的諸問題についての内容を児童生徒に適切に指導するための技術を身につける。

#### 5. 授業の内容、教員の授業運営

先に述べた研究課題の選択について、学生が 3 回生になって、年度の初めや前期の授業の途中、成績を手渡す時などの機会ある時に話し合いを行った。

後期が始まって第 1 回目の授業で、それぞれのグループが研究テーマを発表した。グループ A が「才能教育」、グループ B が「印象」であった。そこで研究が 15 回で完了する内容にすること、途中で 2、1 回生に対して中間発表会 2 回、最終発表 1 回をもつことを伝えた。その上で、才能教育についてはことばの定義、現状を検索・調査すること、表情については、どんな表情を分析し、何を明らかにするのか具体的にすることを助言した。

第 2 回目にはグループ A は才能教育についてアメリカとオーストラリアに定義があるが日本ではそれが無いこと、グループ B は表情を写真にとって部分をトレースして分析することを試みた結果をそれぞれ 20 分くらいで報告した。教員は、グループ A にはインターネットでかなりの情報が集まること、最終的には模擬授業までできるといいねと提案した。また、グループ B には、表情すべてを分析することは大変でないか、パソコンソフトに表情分析ソフトがないか調べることを提案した。

第 3-6 回目も同じく、学生の調査・研究結果の発表、その後に教員の助言・提案を行った。

第 7 回は 2、1 回生の前で研究発表をそれぞれのグループが 15 分で行った。その後、発表を基に今後の研究の方向を話し合った。そして、グループ A は才能教育をアメリカからオーストラリアについても調べること、模擬授業の改善について、グループ B は表情を笑顔に限定して分析し、笑顔を作る方法を検

討することとなった。

第 8-10 回は上記と同じく学生の調査・研究の発表、その後に教員からの助言・提案を行った。

第 11 回は 2 回目の中間発表を行った。グループ A は代表的な 2 カ国の才能教育についてまとめた。グループ B は笑顔の作り方について笑顔スイッチを研究開発した。そこで、教員からグループ A には日本の教育における発展的学習を分析して、それも踏まえて模擬授業をして欲しいことを提案した。グループ B には表情の背景にある構造(筋肉)や機能、気持などについても分析してまとめて欲しいことを伝えた。

第 12、13 回は上記のように学生の発表と教員の助言を行った。

第 14 回の最終発表では 3 回生に、2、1 回生と教員 2 名の合計 35 名で 2 時間の発表会を行った。

初めに担当教員から総合演習の目的について 20 分くらいの導入を行った。その後、それぞれのグループが 15 分の研究経過、15 分の研究成果を発表した。グループ A は成果として、文献検索、著書の分析、専門家のインタビューなどをまとめ、最後に才能児がいる学級において通常の教員と才能教育に目覚めた教員の授業の一例を実演して、才能教育のあり方を紹介した。グループ B は笑顔の作り方を構造や機能を基に説明し、笑顔スイッチ、笑顔体操、笑顔作りの歌などを紹介し、最後に参加者全員で笑顔を作った。

以上の研究を成果報告書にまとめる予定である。

## 6. 学生の受講姿勢

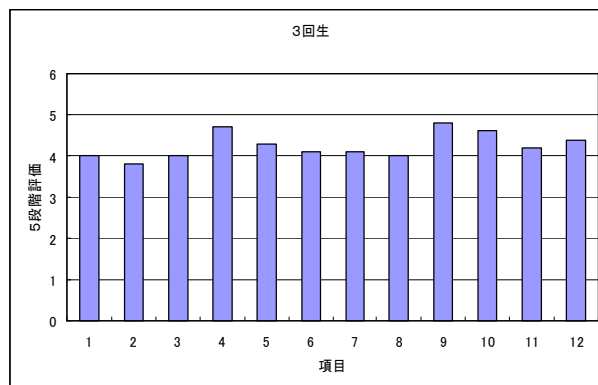
学生はそれぞれのスケジュールを調整して、自主的に興味深い研究をやり遂げた。互いの時間を合わせるが大変であったと聞き、やはり授業時間に研究打ち合わせができるように調整することが重要であった。

## 7. 学生の授業評価

### 1) 3 回生の授業評価

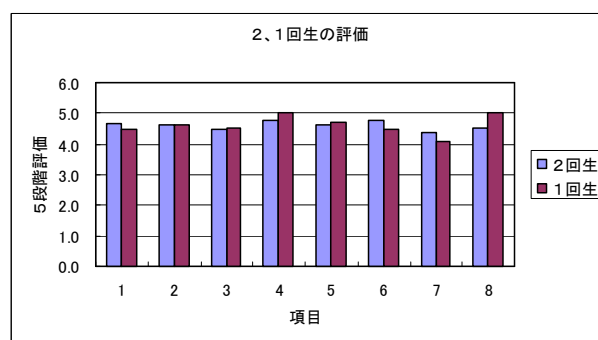
この授業は学生が中心となって授業を牽引し、教員は補助的な立場で参加した。その結果、授業アンケートの結果は担当教員が今までに経験しない高い評価となった。この評価は学生自身が作った授業の評価となったためと思われる。アンケート用紙は手元には受講生 12 人中 10 人分しかなかったため、その結

果である。項目 5 がそう思う、項目 4 はややそう思うで、項目 2 以外は評価 4 以上であった。項目 2 は「授業の構成・展開はよかった」で平均 3.8 あった。これは研究時間の調整が難しく、困ったことが自由記述欄にもあった。



### 2) 2、1 回生の 3 回生発表の評価

このアンケートは中間発表 2 回と最終発表に参加した学生に対して最終発表の授業評価を依頼したものの結果である。アンケートは 24 名の学生からのものである。授業評価の各項目の平均は 4 以上で、自由記述にも 3 回生の研究テーマの選択、取り組み、発表に学ぶことが多かったこと、次に自分たちが研究する時の期待が語られていた。



## 8. まとめと今後の発展・課題

この授業は学生が研究テーマの選択を行い、自分達なりに研究を進め、研究発表を授業で行うことで研究経過をそれぞれが確認し、教員は必要に応じて助言・提案して後押しをすることに徹した。まさに学生の学び (Learning) を支援・促進 (Promotion) した。この授業方法は学生の課題解決能力を高め、学生の授業評価を高めるものであった。この方法を通常の知識・理解を身につける授業へいかに取り入れるかが課題である。